

目 次

— Table of Contents —

第5回SWYAA国際大会	3
「世界青年の船」事業事後活動連携強化プログラム	13
「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議	23
5th SWYAA Global Assembly in Mexico	57
Ship for World Youth Program Post-Program Activities Promotion Programs	67
Tokyo Conference for the Ex-Participating Youth of the Ship for World Youth Program	77
資料編 (Appendix)	115

第5回SWYAA国際大会

2011年9月28日～10月2日



第5回SWYAA国際大会

SWYAA国際大会の目的

- 1) 参加国や参加回の異なる「世界青年の船」事業の既参加青年が出会う機会を提供し、意見交換を通じて国際ネットワークの強化を図る機会とする
- 2) 既参加青年が訪問国の文化と人々を知る機会とする
- 3) 既参加青年がボランティア活動に参加し、社会貢献活動に参加する機会を提供する
- 4) 世界各国で実施されている事後活動について情報交換をする機会とする
- 5) SWYAA国際大会の開催国のSWYAAの活性化を図る

概要

- 大会名称：第5回SWYAA国際大会（第16回インターナショナル・リユニオン）
- 開催日程：公式活動 - 2011年9月28日～10月2日
オプショナル・ツアー - 2011年10月3日～6日
- 主催：日本青年国際交流機構
メキシコ「世界青年の船」事後活動組織
- 同時開催：「世界青年の船」事業事後活動協議会
- テーマ：「既参加青年の地域への貢献」
- 参加者：US\$400 (オプショナル・ツアー US\$400)
- 参加者：約70名(15か国)

メキシコ「世界青年の船」事後活動組織はメキシコで催された第5回SWYAA国際大会の準備のための実行委員会を編成した。公式プログラムは2011年9月28日～10月2日の期間に実施された。また希望者は、2011年10月3日～6日の期間に国際大会実行委員会が企画したオプショナル・ツアーへ参加した。実行委員会は社会活動及び公式行事における視察先の選定から調整に至るまで、詳細な日程を準備した。実行委員はいくつかの作業班に分かれ、各班は実行委員会で定めた主な役割に基づき、担当の作業をこなした。以下が実行委員会に基づき編成された作業班の一覧である。

- ・ グループ・リーダー
- ・ 渉外班
- ・ 式典担当班
- ・ 総務班
- ・ 事後活動協議会担当班
- ・ オプショナル・ツアー担当班
- ・ データベース班

実行委員長はこれらの作業班の取りまとめを行った。

活動日程

日付	時間	活動
公式プログラム		
9月28日(水)	終日	参加者到着
	20:00 - 21:30	歓迎レセプション兼オリエンテーション(夕食含む)
9月29日(木)	8:30 - 9:15	<朝食>
	9:30	開会式会場へ移動(徒歩)
	10:20 - 11:30	公式プログラム開会式 - 開会あいさつ
	11:30 - 11:50	<休憩>
	11:50 - 12:15	基調講演
	12:15 - 14:15	事後活動協議会 (Part 1) - SWYAA 東京連絡会議2010に関する報告 - 各国における事後活動の成功事例紹介 メキシコ、日本、パーレーン、ペルー、エクアドル、オーストラリア
	14:30 - 16:20	<昼食>
	17:00 - 18:30	メキシコ国立人類学博物館訪問
	19:40 - 22:00	公式歓迎ディナー
9月30日(金)	8:30 - 9:30	<朝食>
	11:00 - 14:30	メキシコ・シティ市街地訪問
	14:30 - 16:30	<昼食>
	16:30 - 17:30	ホテルへ移動、休憩
	17:30 - 19:10	連邦議会議員との意見交換会
	20:50 - 22:30	ルチャ・リブレ(メキシカン・プロレス)観戦
	23:45 - 2:00	マリアッチ(メキシコ伝統の楽団による演奏)見学
10月1日(土)	7:30 - 8:30	<朝食>
	9:00 - 10:40	移動(バス)
	10:40 - 11:45	テオティワカン市による歓迎式典
	12:00 - 16:30	古代都市テオティワカン訪問
	17:00 - 18:30	<昼食>
	18:30 - 21:30	ホテルへ移動、着替え
	22:00 - 01:30	フェアウェル・ディナー
10月2日(日)	9:30 - 10:30	<朝食>
	11:20 - 12:30	事後活動協議会 (Part 2) - プレゼンテーション(宮城県、フィジー) - 今後の事後活動に関して協議、発表
	12:30 - 13:00	閉会式 - 閉会スピーチ - 修了証授与 - 第6回SWYAA国際大会開催地発表
	13:00 - 22:20	ソチミルコ訪問 世界遺産Parque Ecologico Cuemanco見学
オプション・ツアー		
10月3日(月)	午前	バスで移動
	16:50 - 19:30	セント・ミッシェル市内観光
	19:30 - 21:30	移動
	21:30 - 22:50	グアナファト到着<夕食>
	00:30	ホテルチェックイン

日付	時間	活動
10月4日(火)	8:30 - 10:00	<朝食>
	11:30 - 12:30	移動(バスとケーブルカー)
	12:30 - 16:30	ファレス劇場、口づけの小道など見学
	16:30 - 18:00	<昼食>
	18:00 - 21:45	イダルゴ市場、グアナファト大学見学
	21:45 - 23:40	<夕食>
10月5日(水)	8:30 - 10:00	<朝食>
	10:10 - 11:00	移動(バス)
	11:00 - 14:00	炭鉱、ミイラ博物館見学
	14:30 - 16:00	<昼食>
	16:00 - 20:00	自由散策
	20:00 - 21:45	<夕食>
	22:00 - 00:30	エストゥディアンテ(楽団と共に夜の町を練り歩くツアー) 参加
10月6日(木)	8:30 - 10:00	<朝食>
	10:30 - 16:30	移動(バス)
	16:30	メキシコシティ到着 オプショナル・ツアー解散

9月28日

SWYAA国際大会実行委員であるメキシコ「世界青年の船」事後活動組織のメンバー(以下、実行委員)は、第5回SWYAA国際大会のパナーを持って、ベニートファレス国際空港に到着する既参加青年を出迎えた。内閣府の吉田真見参事官補佐、大河原友子日本青年国際交流機構(IYEO)会長も無事到着した。出迎えば概ね順調であったが、夜に空港内電気系統のトラブルが発生したため閉鎖となり、ほかの空港への到着が余儀なくされた。参加者数人がこのトラブルに巻き込まれたが、実行委員会の適切な対応により、参加予定者全員が無事にホテルに到着した。参加者は大会受付で、日程表、名札、大会公式Tシャツを受け取った。

歓迎レセプションでは、大会委員長Kento Watanabe氏の開会あいさつから始まり、各実行委員会からホテル近辺の案内、危険な地域、交通に関する注意事項など、安全に関する注意事項が通達された。メキシコ・シティの治安は悪いとよく言われるが、危険な場所さえ避ければ、それほど治安が悪い場所ではないということが強調された。

食事の後、アイスブレイキングとして様々なアクティビティを行い、各国間、また異なる世代間で交流を深めた。

9月29日

10時20分頃から、メキシコ外務省別館において、公式プログラムの開会式が行われた。Watanabe大会委員長、メキシコ青少年協会最高責任者 Carreon氏、大河原IYEO会長、内閣府吉田参事官補佐、メキシコ外務省Xilotl大使、在メキシコ合衆国日本大使館目賀田大使の

各氏からあいさつの後、記念品の贈呈、記念撮影が行われた。休憩をはさみ、Aldama外務省大臣による、基調講演「外交における青少年の重要性」が行われた。その後、事後活動協議会(パート1)として、東京連絡会議2010の報告や各国における事後活動の事例及びシャンタル・ペイダー基金の紹介が行われた。

市内のレストランで昼食を済ませた後、17時頃からメキシコ国立人類学博物館を訪問した。アステカやマヤ文明の遺跡から発掘された、人類学的に非常に貴重な出土品などを目にする事ができた。特にアステカの生贄祭壇や太陽の石(アステカ・カレンダー)は当時の死生観や、技術の高さを思わせるものであった。

メキシコ外務省別館に戻る途中、独立記念塔に立ち寄り、記念撮影をした。公式歓迎ディナーでは、メキシコ外務省アドバイザーColumba Calvo氏のあいさつの後、内閣府吉田参事官補佐のあいさつがあった。吉田参事官補佐からは「世界青年の船」事業が、参加青年に対して非常にインパクトの大きいプログラムであり、下船後の活動も非常に活発であることに感銘を受けているというコメントがあった。

各国での活動事例及びシャンタル・ペイダー基金について

1. メキシコ

• Deportes para compartir

ゲームやスポーツを通じて、子供たちにミレニアム開発目標に触れさせ、地球的規模の問題に立ち向かえる人材を育てるプログラム。メキシコ国際連合協会(AMNU)から正式な活動として認められている。

- ・ 物資供給プログラム

身の回りで余っているものを、メキシコ国内の恵まれない人々に供給するボランティア・プログラム。2人で始めた活動も今では多くのボランティアを巻き込み、今まで10,000名以上に物資を供給してきた。

2. 日本

- ・ IYEOの活動

IYEOが東日本大震災の被災地に対して行ってきた活動を報告。メンバーの安否確認、緊急支援、ボランティア活動や募金活動などの被災地支援活動、また各国における事後活動組織の様々な支援活動も紹介するとともに、大河原会長が世界中からの支援に対する感謝の気持ちを述べた。

- ・ Tupendane

SWY22の有志により始まったケニアの小学校を支援するプロジェクト。勉強会やイベントを通じて寄付を募り、教科書、資金援助などの支援活動を行っている事例を紹介。

3. バーレーン

バーレーンにおける参加青年の選考方法、社会貢献活動などの事後活動を紹介。

4. ペルー

ペルーで行ったバスツアー（Bus for World Youth）の報告や参加青年の選考方法、ボランティア活動、日本大使館との関係の築き方などを紹介。

5. エクアドル

ソーラン節クラブの設立、エクアドルを訪れた既参加青年などの紹介。

6. オーストラリア

フィジーで実施している図書館建設プロジェクト。既参加青年のネットワークを通じて、一人一冊の本の寄贈を呼びかけた結果、たくさんの本が集まったので、フィジーの村に図書館を建設することができた、という事例を紹介。

7. シャンタル・ペイダー基金

既参加青年であるChantal Paydarの癌による死を追悼して設立された基金の紹介。人道的なアプローチにより、民族、性別、政治的不平等の問題が解決されることを目指す活動を行っている。

9月30日

朝食後、バスで市内観光へ向かった。独立記念ソカロ中央広場で四つのグループに分かれ、それぞれ国立宮殿、カテドラル、ラテンアメリカ・タワーなどに向かった。国立宮殿では、中央階段の踊り場や回廊にアステカ建国から近代までのメキシコの歴史を物語る壮大な壁画が描かれている。実行委員が各グループのガイドを務め、特にこの壁画を詳しく説明してくれた。実行委員の

話を聞いていると、自国の歴史を詳しく知っていることが常識のように感じ、自国に誇りを持ち、歴史を詳しく知ることの重要性を感じた。

ホテルに戻り、メキシコ下院議長など様々な要職を歴任したPorfirio Muñoz Ledo議員と意見交換会を行った。Muñoz Ledo氏の要望により、参加者全員の簡単な自己紹介から始まり、参加者から政治に関する質問や意見を募るという形で意見交換会が行われた。現在、エジプトを始めとするアラブ諸国で起きている動きから、ラテンアメリカ・メキシコの政治、メキシコにおける報道の自由、青年の政治参加など多岐にわたる話題に対し、Muñoz Ledo氏独特のパワフルな口調で意見が述べられ、既参加青年も積極的に意見を交わしていた。

意見交換会の後、メキシコで非常に人気のある、ルチャ・リブレ（メキシカン・プロレス）の観戦に向かった。会場は平日の夜にもかかわらず、非常に盛り上がりしており、一部の参加者はレスラーマスクを被りながら応援を行った。その後、マリアッチ（メキシコ伝統の楽団による演奏）で有名なガリバルディへ向かった。ガリバルディでは非常に多くの人が街に溢れ、マリアッチの楽団が至るところで見受けられた。レストランに入ると、マリアッチの楽団が我々のために演奏し、一緒に歌い、踊り、楽しい時間を過ごすことができた。ルチャ・リブレやマリアッチを通じて、メキシコの庶民文化を肌で感じることができた。

10月1日

10時に出発し、バスでテオティワカンへ向かった。テオティワカン市に到着後、市庁舎前広場で盛大な歓迎セレモニーが行われた。セレモニーでは、Alfonso Humberto Favila Saavedra氏（テオティワカン市顧問）、Rodolfo Gómez Escobedo氏（テオティワカン市観光工芸局長）のあいさつの後、歓迎のダンス、地元工業学校による改造車パフォーマンスの披露があった。訪問団からはお礼として、ソーラン節を披露した。その後、古代都市テオティワカン遺跡に向かった。

テオティワカン遺跡では、二つのグループに分かれて観光した。観光の途中、ガイドであるRicardo Cervantes Cervantes氏により、神殿やピラミッドに入る許可を得る儀式として、人と人をつなぐ古代の儀式が行われた。Cervantes氏はインディオの血を引く人物で、ガイドというよりは、アステカ文明の研究者といえるほどアステカ文明に精通している方であり、テオティワカンやアステカについて非常に詳しい説明を受けることができた。テオティワカンにはケツァルコアトルの神殿、太陽のピラミッド、月のピラミッドがあるが、標高が2,000mを超え、すべての遺跡に登るのは体に非常に負担がかかるため、登るのを断念する者もいた。しかし、ピラミッドから見る光景は当時の太陽崇拝の宗教観を感じ取るこ

とができ、非常に印象に残った。

昼食はテオティワカン市のÁlvaro Sánchez Mendoza市長を迎え、メキシコ料理を振舞われた。ホテルに戻った後、フェアウェル・ディナーの会場であるReforma 222へ向かった。フェアウェル・ディナーは非常にカジュアルな雰囲気の中執り行われた。参加者は国際大会の成功を祝い、また、別れを惜しんだ。

10月2日

朝食後、事後活動協議会（パート2）が行われた。まず、宮城青年国際交流機構の菊地喜正顧問により、東日本大震災の被災地の写真を使った報告が行われた。報告では、実際に現地に住んで経験していなければわからない苦しさや辛さなどが伝えられた。被災地での復興はまだ始まったばかりで、長い意味でのサポートが必要になるという言葉とともに、「世界青年の船」事業を中心とするネットワークを通じた支援への感謝の意が伝えられた。続いて、フィジー参加青年より、既参加青年の一人がフィジー最大のコンテストにおいて優勝し、フィジー・ハイビスカス・クイーンになったことが伝えられた。

その後、事後活動として取り組みたい内容に関して、四つのグループに分かれ討論し、まとめた内容を班ごとに発表した。世界各国で様々な活動が活発に行われているが、統一のウェブサイト、ロゴ、ルールなどを作れば、より効率良く活動・運営ができるという意見が出された。

事後活動協議会で提案された主な内容：

- ・ 経験を共有するウェブサイトの構築：既参加青年が行ったプレゼンテーション資料などを自由にアップロード/ダウンロードできるようなサイトを構築する。
- ・ 各国の学校をつなぐ：様々な国の生徒をつなぐようなネットワーク作り。手紙の交換などをする際、言葉の障壁を取り除くよう既参加青年が手助けする。
- ・ 「世界青年の船」記念日である1月18日に世界中で同時にイベントを行う。
- ・ 事後活動組織のウェブサイトを統一：現在、各国の事後活動組織のサイトが乱立しているが、イメージを統一した方が国際的組織であることがアピールできる。
- ・ ロゴを統一：各国で独自のロゴを作成しているが、統一のロゴ（＋国名）の方が「世界青年の船」事業の事後活動組織であることが一見してわかるので良い。
- ・ フェイスブック、ツイッターのようなソーシャルメディアを使いこなすための研修を実施する。

- ・ 地域ごとに集まる機会を設ける。
- ・ 各国の事後活動組織の会則を共有し、互いから学ぶ（参加青年の選考方法、役員の選出方法など）。

発表の後、閉会式が執り行われた。メキシコ「世界青年の船」事後活動組織会長Alberto Negrete氏の閉会のあいさつの後、修了書の授与、実行委員会からIYEO役員への記念品の贈呈、大河原友子IYEO会長から実行委員に対する感謝のあいさつと記念品の贈呈が行われた。その後、第6回SWYAA国際大会の開催地がバーレーンであることが発表された。また、毎年夏に北欧諸国で行われていたリユニオンに関して、参加は今まで北欧諸国の既参加青年に限られていたが、来年からはどの国の既参加青年であっても参加できるようになったことが発表された。

閉会式終了後、バスで世界文化遺産ソチミルコに向かった。メキシコ・シティはかつて湖であった土地を埋め立てて作った町であるが、ソチミルコは埋め立てる前の自然が残っている場所である。ソチミルコのソチミルコ生態学公園に到着後、トラヒネラと呼ばれるメキシコの伝統的な手漕ぎボートで水路を移動し、広場へ移動した。行き交うトラヒネラの上では、マリアッチを頼んで食事をしているグループも多く見られた。広場ではソチミルコのスポーツ文化ディレクターであるMax Corrales氏のあいさつがあり、その後、記念品の贈呈と記念撮影が行われた。広場ではクエマンコに関する説明を聞き、伝統的なサウナを見学した。バーベキュースタイルでの昼食・休憩の後、再び船で水路を移動した。途中の島には不気味な人形で飾られた浮島があり、この「人形の島」に関する諸説を聞いた。その後、予定を大幅に過ぎてメキシコ・シティへ帰着、公式プログラムを終了した。

10月3日

朝食後、オプション・ツアー参加者はグアナファトへ向けてバスで出発した。大型バス1台に乗り込み、バスツアーが始まった。連日のハードスケジュールで疲れた体を休ませるには絶好の場であったが、それでもバスの中でも相変わらず、歌を歌ったり、大騒ぎしているメンバーもかなりいた。バスの中でお弁当を食べ、途中休憩を取りながらではあったが、サンミゲル・デ・アジェンデに到着。18世紀の美しい街並みそのまま保存されており、今では芸術の町として知られている。1926年には国定コロニアル記念都市に指定されている。町の中心にあるサンミゲル教会を見学した後は、古い教会やセンスの良いお土産屋さんなどを自由に散策した。再び、バスに乗り最終目的地であるグアナファトに到着。バスは町中には入れないので、町外れで降り、30分程歩いて中心部ラユニオン公園前のレストランで夕食となった。食

事をしながらピアノの弾き語りがあったが、最終的には我々のグループのリクエスト曲を弾いてもらい大合唱となった。いつものごとく大変な盛り上がりでグアナファトでの夜は更けていった。

10月4日

朝は遅めに集合し、バスでケーブルカー乗り場まで行った。中世都市グアナファトはコロニアル時代の歴史的な建物と南米らしいカラフルな建物のコントラストがとても個性的な美しさを醸し出し、メキシコで一番美しい町と言われている。現在はユネスコの世界遺産として町全体が保護されている。そこから町を一望できる丘の上からケーブルカーで市街地まで下った後、ファレス劇場を見学した。通りに向かい合って建つ家のバルコニーから恋人達がキスもできたという「口づけの小道」などを散策した後、遅い昼食を取った。その後イダルゴ市場やグアナファト大学を訪れ、夕食までの時間自由時間となった。遅く始まった夕食だったが、かろうじてその日のうちにホテルに戻ることができた。

10月5日

朝食後、銀鉱山の跡地バレンシアーナ・サン・ラモンを訪れた。グアナファトはかつて大量の銀を産出しており、現在も操業している坑道がある。実際にヘルメットをかぶり、かなり深い坑道内部にもぐってガイドの案内を聞いた。その後ミイラ博物館を見学した。グアナファトの鉱物質の土壌と乾燥した気候が普通の埋葬体をミイ

ラ化させてしまうという説明があった。この博物館には、洋服を着たままの大人から赤ちゃんのミイラまで100体以上展示されている。

遅い昼食後、教会や博物館巡りをするなどの自由時間となり、夕食で再会。その後エストゥディアンティーナと呼ばれる楽団で、中世の学生服を着て愛の歌を奏でる楽団のツアーに参加。2時間以上も歌いながら街中を練り歩いた。楽団のメンバーとも交流を深め、この日も長い夜となった。

10月6日

朝食後、ホテルを出発、途中休憩を取りながら夕方にはメキシコ・シティに戻った。メキシコ・シティに延泊する者、まだ旅を続ける者、帰国する者も、皆で名残惜しくもサヨナラを言い、世界の何処かでの再会を約束して別れを告げた。こうして、オプショナル・ツアーは無事終了した。

メキシコ政府及び既参加青年の献身的な受け入れで、今回の国際大会及びオプショナル・ツアーは大成功のうちに終えることができた。参加者全員が一生忘れることのできない程の素晴らしい思い出を作ることができた。国際大会は「世界青年の船」事業で培われた友情の絆、事後活動の大切さを参加者全員が再確認することができるとても良い機会だと思う。「SWYスピリット」が世界に広く広がって行くのを肌で感じることができる大会となった。

日本青年国際交流機構会長からのコメント

大河原友子

「世界青年の船」事業への熱い思い、SWYAA国際大会（グローバル・アセンブリー。以下、GA）への期待が一つになった上に、ラテンの乗りの良さで盛り上がりGA2011は以下のようにその目的が十分達成されました。

- ① 年代を超えた既参加青年が集まり情報交換をしたり、世界中の事後活動組織ネットワークを強化する。
参加者の中には事業参加年や国が違い初対面のメンバーもたくさんいたが、SWY family の一員＝志が同じ方向を向いているという共通点があるため、すぐに皆が打ち解け共に活動できるのがGAの魅力であると思った。
- ② プログラム中に学んだ事をいかし、下船後それぞれが社会の中でその経験をどのようにいかしているかを報告する。

今回は、1)メキシコ国際連合協会（AMNU）から正式な活動を認められている人材育成プログラム、2)ケニアの小学校を支援するプロジェクト、3)バーレー

ンにおける社会貢献活動、4)ペルーで行ったBus for World Youthプログラム、5)エクアドルでのソーラン節クラブ設立、6)オーストラリアで始まったフィジー図書館建設プロジェクト、7)シャンタル・ペイダー基金、8)日本の東日本大震災復興支援活動などが発表された。異文化理解、社会貢献、平和などのキーワードを基に、世界中ですばらしいアイディアが形になり実践されていることは正に「世界青年の船」事業の成果であると実感した。

- ③ 事後活動協議会で話合われたことを実現する。

経験を共有するウェブサイトの構築、各国の学校をつなぐ、「世界青年の船」記念日1月18日に世界同時にイベントを行う、事後活動組織のウェブサイトを統一、ロゴを統一、ソーシャルメディアの利用法、地域ごとの集会など多くの意見交換をした。一つ一つ実現に近づけるよう今後の継続的な活動を期待する。

- ④ 開催国の文化や人々を理解する。

飛びっきり明るく心温まる既参加青年や現地の

人々のメキシカンホスピタリティーを肌で感じる事ができた。また、メキシコ外務省Xilotl大使やメキシコ外務省アドバイザーEmbajadore Calvo氏、メキシコ下院議長等要職を歴任したPorfirio Muñoz Ledo議員などの話もメキシコを知る上で役立った。

文化理解という面では、三つの世界遺産であるメキシコシティ市街地、古代都市テオティワカン、ソチミルコを訪問したり、ルチャ・リブレ（メキシカンプロレス観戦）、マリアッチ（伝統的な楽団演奏）を聞くことができ、南米の歴史や文化を多様に学ぶことができた。

オプションツアーでは三泊四日で古都グアナファトへ行ったが、この間もGAの目的を強化するような場面も多く、更に友情や相互理解を深め大変楽しく充実した時間となった。

このような素晴らしいGAを開催してくれたメキシコのKento Watanabe実行委員長やAlberto Negreteメキシコ事後活動組織会長を始め第5回GAの開催にかかわったすべての方々に感謝申し上げます。VIVA Mexico!!!熱い思いを来年のパーレーンGAに繋げていきましょう！

メキシコ「世界青年の船」事後活動組織代表からのコメント

アルベルト・ネグレテ

世界各地から多くの友人を受け入れることができたことは、私たち全員の喜びでした。また特別の信頼を得て、私たちの家に日本の友人を招待することができたことは大変光栄でした。

我が国は今、非常に困難な状況を経験していますが、ゲストの皆様と私たちの文化を共有し、私たちの優れた宝を皆様に示すことができたこの大会は非常に素晴らしい機会であり、この変化の時期に希望と力をもたらしてくれるものでした。

不思議なことに、今回の経験を共有したすべての人々と私たち全員が素晴らしい一体感を持ちました。事業参加年度が異なっても互いに親密になることができ、友情という美しいエネルギーが旅の毎日を取り巻いていました。私たちの中に平和の種が蒔かれたことを間違いなく感じています。

「世界青年の船」事業の数々の素晴らしい出来事が私たちの元に戻ってきたかのように、私たちは当時の記憶を再体験し、そして当時よりも成熟した観点、少なくとも異なった観点から自分たちの現実を見ることもできました。新たなプロジェクトを生み出すための火を燃やし続けるためには多大な努力が必要です。

これまでと同様、今回も寛大なる日本政府から御招待

を得る機会をいただき、深く感謝しています。明確なビジョンを持つこの事業への感謝として、私たちの中に芽生えたものの中からお返ししたいと願っています。国際大会は間違いなくこの世界の新しい世代が将来の夢の理想を計画するための大きな取組を継続する最善の方法です。私たちの心に素晴らしい記憶をもたらし続けてくれるすべての瞬間に、いつものように心から感謝を捧げます。

このイベントの運営を私たちに任せてくださった日本青年国際交流機構(IYEO)の大河原友子会長と齋藤珠恵氏及び特別なゲストである内閣府の吉田真晃氏に特別の感謝を捧げます。またこのイベントの開催のための御支援及び貴重なお時間をいただいたメキシコ事後活動組織メンバー及びそのほか素晴らしい皆様にも感謝いたします。メキシコ・シティ政府のヘスス・ヒメネス氏にも多大な御支援に対し感謝いたします。そしてすべてのゲストの皆様には、お別れは大変寂しいですが、近いうちにまたお会いできることを願っているということをお伝えします。最後に、この素晴らしいアイデアを温め、メキシコに「SWYスピリット」を取り戻すことを実現してくれたケント・ワタナベ氏に特別の感謝を捧げます。

メキシコ国際大会実行委員長からのコメント

ケント・ワタナベ

日本青年国際交流機構(IYEO)及びメキシコ「世界青年の船」事後活動組織主催の第5回SWYAA国際大会実行委員会の公式レポートを提出することができて大変嬉しく思っています。このレポートは今大会のすばらしい思い出の振り返りとしてだけでなく、近い将来に国際大会を開催しようとしているすべての事後活動組織とそのメンバーのための主な情報源として役立つものでなければなりません。

第5回国際大会の開催は、それにかかわった私たち全員にとって大変な名誉でした。それは私たちの「SWYスピリット」を再燃させ、同じ目標と情熱を持つ既参加青年及び仲間と再びつながる機会を与えてくれ、そして「世界青年の船」事業に携わったすべての皆様へのさやかな感謝の印を示す機会でもありました。私たちの多くにとって、「世界青年の船」事業とは人生を形作り、目標に向かって少しずつ前進する支えとなり、想像できないほど私たちの心を動かしているものであることは事実です。

国際大会での実行委員会の主な目的は、「下船後、既参加青年が自分たちのアイディアを発展させ社会に貢献する際に直面する課題」についてのディスカッションを促すことでした。その結果、参加者たちはプログラム終了後に立ち上げたソーシャル・プロジェクトの成功事例を共有することができました。すべての参加者は、これらの多くのプロジェクトが実現したパワーと、自分たちのコミュニティに与えた様々な効果と恩恵に深く心を動かされました。そのほかにも、既参加青年が下船後に直面する問題を克服するためのアクションの実施について、様々なアイディアを共有しました。

私たちの多くにとって「世界青年の船」事業はふじ丸やにっぽん丸を下船したときに終わるものではなく、最初の一步であることは明らかです。私たちの旅は、SWYスピリットが生み出すアクションを推進する力と共に永遠に続くのです。

この機会に、第5回国際大会の開催実現に力を貸してくださった皆様に深く感謝いたします。

- ・ 内閣府と在メキシコ日本国大使館を通じて「世界青年の船」事業及び事後活動に御献身いただいた日本政府の皆様。「世界青年の船」事業運営に共にかかわらせていただき、どれほど感謝しても足りません。
- ・ 国際大会の開催を私たちに一任し、数か月に及ぶ激務の間、御支援いただき忍耐強く協力して下さったIYEOとスタッフの皆様。
- ・ 様々な手段とレベルで御支援いただいたメキシコ政府の皆様。
- ・ 時間とエネルギーと心を国際大会開催に捧げてくれたメキシコ事後活動組織のメンバーとすばらしいそれぞれの皆様に、温かい特別の感謝「ムーチャス・グラシアス（ありがとう）」を捧げます。皆様の力がなければ成功はありませんでした。
- ・ 最後に、メキシコ大会への参加を決意したすべての既参加青年の皆さんがいなければ、この大会は実現しなかったでしょう。私たちを信頼し、参加して下さったことに感謝するとともに、近い将来また皆さんをお迎えできることを願っています。「私の家はあなたの家 (Mi casa es su casa.)」であることを忘れないでください。

国際大会を開催する機会を得たことは、信じられないほどすばらしい旅でした。そして「世界青年の船」事業が生み出した結びつきが、事業参加年度も文化も国籍も越え、壊れることなく永遠に続いていくのだという確信を新たにしました。既参加青年の皆さんに、人生一度は国際大会に参加していただきたいと思っています。皆さん、このレポートを楽しんでください。そして2012年にバーレーンで再会しましょう！

最後にもう一度、ムーチャス・グラシアス！

「世界青年の船」事業 事後活動連携強化プログラム

2012年2月18日～2月24日



第24回「世界青年の船」事業事後活動連携強化プログラム

派遣者

- | | | |
|---------|--------------------|---------------------|
| ・高下 正晴 | 第3回「世界青年の船」事業参加青年 | 日本青年国際交流機構 中国ブロック幹事 |
| ・中村 直子 | 第18回「世界青年の船」事業参加青年 | 佐賀県青年国際交流機構会長 |
| ・筒井 麻衣子 | 第22回「世界青年の船」事業参加青年 | 千葉県青年国際交流機構会員 |

派遣日程

月 日	日 程
2月18日(土)	派遣代表者 日本出発 派遣代表者 スリランカ(コロンボ) 到着 第24回「世界青年の船」事業(SWY24) 参加青年と合流
2月19日(日)	スリランカ出航 事後活動セッション実施準備等
2月20日(月)	【第1回事後活動セッション】 14:15 - 17:00 セッション1-1 14:15 - 15:35 - 事後活動セッションの概要説明 - アイスブレイキング(「世界青年の船」事後活動組織(SWYAA)に関するクイズ) - SWYAAの概要と各国の活動紹介 - SWY24に乗船している既参加青年の紹介 - 既参加青年の個人における活動紹介(全体への事例発表) ☐ケニア教育支援「Tupendane」について事後活動派遣代表者 筒井麻衣子(休憩 15分) セッション1-2 15:50 - 17:00 - 既参加青年の個人における活動紹介(分科会形式) ☐SWY24に乗船している既参加青年が13の分科会で事後活動の事例発表
2月21日(火)	第2回事後活動セッション実施準備等
2月22日(水)	【第2回事後活動セッション】 9:35 - 12:20 セッション2-1 9:35 - 10:55 - 第1回事後活動セッションの総括及び第2回事後活動セッションの説明 - 既参加青年の組織における活動紹介(全体への事例発表) ☐SWYAA ペルーの活動について ペルー・ナショナル・リーダー Hiroshi Hironaka 及び ファシリテーター Jose Sano Takahashi ☐佐賀県青年国際交流機構での活動について 事後活動派遣代表者 中村直子 ☐スリランカ教育支援「One More Child Goes To School」について スリランカ・ナショナル・リーダー Chamil Nishanthe Samarasinghe セッション2-2 11:00 - 12:20 - 国別/地域別(日本参加青年)に分かれてのグループ・ワーク ☐国別、地域別で、自らが行う事後活動の企画 - セッションのまとめ
2月23日(木)	第24回「世界青年の船」事業 シンガポール到着 派遣代表者 シンガポール出発
2月24日(金)	派遣代表者 日本到着

活動内容

ねらい

派遣者は、第24回「世界青年の船」事業（以下「SWY24」）の事後活動連携強化プログラムにおいて、次のねらいを持って事後活動セッション及びそのほかの自主活動を実施した。

- ・ SWY24参加青年（以下「参加青年」）が内閣府の実施する青年国際交流事業、日本青年国際交流機構（以下「IYEO」）及び「世界青年の船」事後活動組織（以下「SWYAA」）について理解を深められるようにセッション及び自主活動に取り組む。
- ・ 事業終了後、参加青年にどのようにIYEOやSWYAA等を通じて、様々な社会貢献活動に取り組めば良いかを理解してもらうために、管理部門及び指導官又はナショナル・デリゲーション・リーダー（以下「NL」）として乗船している日本及び外国の「世界青年の船」事業既参加青年（以下「既参加青年」）とともに事後活動の事例を紹介する。
- ・ SWYAAのネットワークや既参加青年が所属する団体（NPO団体など）を活用・連携し、充実した活動に発展させていくことの重要性を伝える。
- ・ 参加青年が、事後活動には様々な役割・方法・かわり方があることを知り、難しく考えずに活動に取り組めるようにする。
- ・ 2回の事後活動セッションを終えた参加青年が、セッションで聴いた既参加青年の活動事例をきっかけに、事業終了後に自分自身がやりたいこと、仲間とやりたいこと、地域でやりたいことを具体的にイメージできるようにする。
- ・ 既参加青年及びIYEOの代表として参加青年と事後活動についての意見交換を行うとともに、参加青年の船内活動についてのアドバイスなどを行う。

SWY24には、派遣者3名を含めて29名という多くの既参加青年が乗船していることから、参加青年に既参加青年が行っている事後活動の事例をできるだけ数多く伝えたいと考え、1日目と2日目の内容を次のように組み立てた。

1日目は個人として行う事後活動の紹介を29名の既参加青年全員がプレゼンターとしてかかわる分科会形式で行い、参加青年自身の興味に合った話を聞いて質疑応答をすることで、自らの事後活動プランのイメージを膨らませる機会とした。

2日目は組織として行う事後活動の紹介を行い、事業終了後、各国SWYAA、都道府県IYEOの単位で活動するときの事後活動プランを検討する機会とした。

今回のセッションで検討する事後活動プランについては、今年から新しく加わったリーダーシップ・セミナーの内容との関係から、実際に行うためのアクションプランを作るというより、事後活動のアイデアをブレイン・ストーミングのように出し、各人の事後活動のイメージを広げることを目標とした。

2日間のセッションで事後活動に対するイメージをつかんでもらうことによって、「自分たちにもできる」と一歩踏み出す参加青年を多く生み出すことを目標として取り組んだ。

活動内容

<2月20日(月) 第1回事後活動セッション>

セッション1-1 14:15 - 15:30

ねらい：参加青年に事後活動の全体像を把握し、SWYAAを身近に感じてもらう。多くの既参加青年がSWY24にかかわっていることを知ってもらい、参加青年の事後活動への興味を高める。

内 容：事後活動セッションの概要の説明、アイスブレイキング（SWYAAに関するクイズ）、SWY24に乗船している既参加青年29名の紹介を行った。続いて、SWY22のメンバーが船に乗っている間に立ち上げた事後活動「Tupendane（ケニアの学校支援プロジェクト）」について、その中心メンバーの1人で派遣者として今回のSWY24に乗船した筒井麻衣子が活動の報告を行った。

所 感：前半の事後活動セッションの概要の説明と既参加青年の紹介については、SWY24に多くの既参加青年がかかわっていることを見ることで、これから実施する事後活動セッションへの期待を膨らませ、セッション1-2で実施する既参加青年が自ら語る分科会へ興味をうまくつなぐことができた。後半の「Tupendane」の発表は、参加青年と同世代の代表者の報告ということもあって、大変興味を引き付けることができた。



セッション1-2 15:45 - 17:00

ねらい：事後活動に対するイメージを、既参加青年の活動事例を聞きながら小グループで話し合いをすることで更に膨らませる。具体的なアイディアがない者も、前向きな意識が持てるようにする。

内容：合計で13の分科会が開催され、参加青年たちは自分たちが興味のあるトピックを選んだ。

<分科会>

1. 教育全般
2. SWYネットワークをいかした自然災害支援
3. SWY広報
4. 国際協力 (JICA)
5. SWY再乗船：未来の参加青年に貢献する
6. 国際協力 (個人)
7. リーダーシップとコミュニティ開発
8. 生涯学習とネットワーキング
9. SWYAA/IYEOの活動のための資金調達
10. SWYAAプロジェクト、SWYAA国際大会
11. SWYスピリットの保ち方
12. 平和構築
13. 起業家精神 (SWYの経験を基に)

所感：事後活動を難しくとらえず、まず自分の興味に合ったところできっかけをつかんでもらうため、既参加青年の個性豊かな経験を共有する分科会を設置した。分科会の内容は、既参加青年のライフワークと密接にかかわるものが多く、参加青年にとって、これからの事後活動や人生設計にヒントとなったことを願う。参加青年は各分科会を通して、それぞれがぼんやり思い描いていた事後活動のイメージをブレイン・ストーミングし、共有し、具現化し、個々の事後活動へのイメージを膨らませた。

<2月22日(水) 第2回事後活動セッション>

セッション2-1 9:35 - 10:50

ねらい：既参加青年が所属している組織で行っている事後活動の代表的な活動事例を紹介することで、参加青年がSWYAAやIYEOの組織の一員としての事後活動へのかかわり方を中心に考える機会とする。

内容：組織として行う事後活動の例として、次の3件の報告を行った。

- ① ペルーの事後活動組織活性化の事例と事後活動の発表／

発表者：ペルーNL Hiroshi Hironaka、管理部員 (ファシリテーター) Jose Sano Takahashi

- ② 佐賀県青年国際交流機構 (佐賀県IYEO) の

活動事例発表

発表者：佐賀県IYEO会長 中村直子

- ③ スリランカ教育支援 One More Child Goes To Schoolの発表

発表者：スリランカNL

Chamil Nishanthe Samarasinghe

所感：組織で行う事後活動について、それぞれ違った切り口で紹介することができた。①は日本大使館との連携強化と組織強化の取組について②は地域に密着した事後活動を行うことで組織の活性化をすることについて③は他国の事後活動組織 (IYEO等) と協力して事後活動を行うことについてそれぞれ報告し、組織で活動することの意義について伝えることができた。



セッション2-2 11:00 - 12:20

ねらい：参加青年が帰国後にSWYAAの一員として行うアクションプランを、プランの「ねらい(何のために、誰のために、何をする)」を意識して具体的に企画する。

内容：外国参加青年は国別に、日本参加青年はブロック別 (地方) にこれまでに聞いた活動事例を参考にして、自分たちが下船後に行う事後活動について話し合い、模造紙にまとめた。単に「活動」するだけでなく、どのような「ねらい」を持って活動するのか、「ねらい」を達成するために何をすべきかについて考えてもらい、模造紙を完成させることなく、互いにしっかりと話し合うことに主眼を置いた。セッション終了前に各国・各地域一人ずつ模造紙を持ってステージに上がり、終了時に提出してもらった。その後、すべての模造紙をエントランスに掲示した。掲示場所には付箋を置き、参加青年が各プロジェクトに対してコメントを付けられるようにした。模造紙に書かれたアクションプランについては、派遣者3名がすべてデータ化し、印刷

して参加青年が国・地域の事後活動案を閲覧し持ち帰ることができるようにした。

所 感：限られた時間の中だったので、具体的なアクションプランを作り込むのは難しそうであったが、特に日本参加青年にとっては地域ごとに集まって話をする機会はこれまでなかったということもあり、このセッションでこのような機会を作ることができたのは良かったのではないと思う。このセッションが、事後活動について考え始めるきっかけとなったことが期待される。



成果

2日間の事後活動セッションにおいては、当初考えていたねらいは達成できたと感じている。今回特に伝えたかったのは、事後活動は取り組みれば取り組むほど価値のある素晴らしいことであるということ、それほど難しく考えずに、どのようなやり方でも、いつから始めても良いのだということの二点であったのだが、派遣者3人と、協力してくれた26名の既参加青年が話した内容や私たちとの交流を通じて、これらを感じてくれたと確信している。

セッション2-2で行った、自国に帰ってから行う事後活動についてブレイン・ストーミング的にアイデアを出してもらったので、多く出されたアイデア、特徴的なアイデアについて、以下にまとめる。

1. 「世界青年の船」事業の広報・活動報告

- ・「世界青年の船」事業の経験を共有する。オンライン・ラジオで発信（エジプト）
- ・大学のセミナーを使った広報（ニュージーランド）
- ・大使館、NGO、大学への広報（ロシア）
- ・カナダ全土で「世界青年の船の日」（International SWY Day）（1月18日）のイベントの開催（カナダ）
- ・インフォメーション・セッション：SWYAA、日本文化（折り紙、寿司、アニメ、日本語、合気道、太鼓、着物、踊り、書道の紹介）を大学、文化施設、学校等で実施（トルコ）
- ・「世界青年の船」事業の体験報告（メディア、スポンサー、既参加青年）（スペイン）
- ・都道府県各地での事業報告会（日本各地域）

2. 子供たちに自分たちの経験の還元

- ・学校の子供たちをやる気にさせるために、必要な情報と機会を提供する（スリランカ）

- ・子供のための英会話教室を開く（北海道・東北）
- ・子供たちに「世界青年の船」事業の経験を話す（総合的な学習の時間）（中国・四国）

3. 既参加青年のネットワークの強化

- ・インド既参加青年のリユニオン開催（インド）
- ・世界青年のキャンプの実施（バーレーン）
- ・ナイル青年の船の実施（エジプト）
- ・自主的な国際大会の開催（ペルー、カナダ、ベネズエラ、トルコ、九州・沖縄）

4. 交流プログラムの企画

- ・プログラム参加国でのホームステイ（エジプト）
- ・ホームステイ、ボランティア活動、観光を組み合わせた交流プログラム：シベリア鉄道プロジェクト（ロシア）
- ・Bus for World Youth（ペルー）
- ・ホームステイ+1（カナダ、ベネズエラ、トルコ、スペイン）
- ・富士山清掃キャンプ（北信越・東海）
- ・農業体験企画（北海道・東北）

5. 日本との関係の強化

- ・日本大使館との絆を強化（「世界青年の船」事業でどのように自分たちが変わったかを報告）（ペルー）
- ・日本大使館との関係構築（ブラジル、スペイン）
- ・国際協力機構（JICA）との関係（ベネズエラ、トルコ）

6. 各国独自の問題を解決するための社会貢献活動

- ・スラム街の識字率向上のための個別指導活動（インド）
- ・健康への意識啓発（メンタルヘルス、エイズ、癌）（インド）
- ・若者への地域環境プロジェクト（ニュージーランド）
- ・国の発展に寄与するために、より多くの権限を持ち、

戦略的な、ダイナミックな若者を育てる（スリランカ）

- ・薬物排除運動（ベネズエラ）
- ・東日本大震災による被災地域での被災者を元気にする「緑側カフェ」の実施（北海道・東北）

7. 地元の外国人に対する社会貢献活動

- ・地元に住む外国人との交流事業を企画する（東京・横浜を除く関東地域）
- ・日本語を地元の外国人に教える（東京・横浜を除く関東地域）
- ・地元に住む外国人のサポートをする（寄付、チャリティ・イベント）（神奈川）

2回目の事後活動連携強化プログラム代表者だからその難しさ

高下 正晴

今回の事後活動連携強化プログラムは、2年前の第22回「世界青年の船」事業に続いて2回目の派遣でした。代表者になってもらえないかという打診があったときは、最初は受けるかどうか迷いました。2年前のときは、「また船に乗れる！」ということが嬉しくて二つ返事で受けたのですが、今回はこの事後活動セッションを行うことがどれだけ大変かということが分かっていたし、このセッションの成功に責任を持たないといけない立場で乗船するということが、大変なプレッシャーでした。

事後活動セッションの難しさは、海外プラントの現地工事に、日本で組み立てた部品を持って行ってはめ込むのに似ている気がします。事後活動セッションをどのような内容でやるかということについては、日本で、ほかの2人のメンバーと（財）青少年国際交流推進センターの担当の皆さんと一緒に考えるのですが、その内容が船の上で進んでいる本体事業のプログラムの中にピタッとハマるものでなくてはなりません。既に行われているプログラムとの重複があったり、的外れなものであったりしては意味がないので、ほかのプログラムとの関係を良く確認しておく必要があります。また、青年たちがどういう状態にあるかによっても、伝え方を変える必要があります。2年前のときは、船に乗ってプログラムの内容を聞いたり、青年たちと話したりした結果、船に着いてから内容を作り直し、修正をしました。今回も、船に着くまでは、本当に準備している内容でいいかどうか、とても不安でした。

乗船してからは、準備してきた私たちの部品が全体のプログラムにうまくはまるかどうかの確認です。部品の組付けの日は船に着いた日の翌日ですので、大急ぎです。また、組付けには船に乗っている26名の既参加青年の力を借りなくてはなりません。実施したいセッションに関する趣旨などを説明し、既参加青年にお願いしたい内容を伝えます。そして、打合せで決まった内容で全体が流れるように説明を考えて、と息つく間もないほどでした。しかし、プログラムの進み具合の確認、既参加青年との打合せと、進めていくうちに、船に乗る前の不安

はどんどん薄らいでいきました。事前に準備していた内容で、きょううまくいくという確信ができたのです。

そして迎える本番当日、2年前は緊張でガチガチだったのですが、今回は不思議なほど緊張していませんでした。腹をくくって、自信を持って飛び出すことができました。

今回のセッションで伝えたかったのは、「事後活動は決して難しいことではない。いろいろなやり方があるのだから、やれることを、やれるときに、やれる範囲でやってみよう。」「事後活動によって、これだけ生き生きとした先輩たちがいる。事後活動は、やるだけの価値があるものだ。」ということでした。それを伝えるために、船に乗っている26名の既参加青年にも協力してもらい、既参加青年自らが発表者となり、できるだけ多くの事後活動の事例を分科会形式で伝えることを考えました。

これが一番のカギでありながら、船に乗るまで調整ができていないポイントであったのですが、既参加青年の皆さんには、急な依頼だったにもかかわらず、嫌な顔一つせず、協力していただき、素晴らしい分科会となりました。仲間のために何としてでも協力するという、SWYer（「世界青年の船」事業の参加者）精神ってこういうことだなあと、実感しました。本当に感謝しています。

私は、43歳という参加青年と比べてかなり高い年齢で参加しました。20歳以上の差というのは、普通の社会であればコミュニケーションをとることに支障をきたしそうなギャップですが、同じSWYerという共通の感覚があったからか、それほど年齢の差を意識することはありませんでした。ベースにある感覚は同じでありながら、やはり新しい感覚を持つ彼らと話をすることはとても新鮮でした。彼らにとってもそうだったのかもしれませんが。今回も素晴らしい経験をさせていただきました。

今回のセッションを素晴らしいチームで完遂できたことを本当に嬉しく思います。今回のセッションを通じて出会ったすべての皆さんに感謝します。ありがとうございました。

2012年3月5日、第24回「世界青年の船」事業（SWY24）は、無事全行程を終え日本に帰港しました。事後活動セッションの数日間を共有したSWY24の参加青年の皆さんが、これからそれぞれの国、環境の中で、既参加青年として同じ土俵に立たれ活動されることを、心より嬉しく思います。

船上での限られた2回の事後活動セッションでしたが、参加青年がその場で見せてくれた将来への希望、その実現に向けて目をキラキラと輝かせている姿、柔らかい発想でどんどんとアイディアをぶつける姿、また逆に、将来への不安を伝えてくれる姿は、自分をしっかりと見つめ正直に表現しようとするものでした。これからは、その思いやアイディアにいよいよ挑戦できるとき。既参加青年として共につながりを持ち、精一杯応援を続けたいと思います。

SWY24には、29名もの内閣府青年国際交流事業既参加青年がNLや管理部などの立場で乗船していました。参加事業の年数差はなんと21才差！参加した事業の航路も、訪問国活動も、人数も、期間も、それぞれ違います。それでもこうして新たに「SWY24」という共通点で、世界へネットワークが広がっていくことを大変嬉しく思います。

限られた事後活動連携強化プログラムの準備期間でしたが、既参加青年に協力を仰ぎ、同じミッションへ向け力を合わせることができました。これができたのも、既参加青年の皆さんが同じスピリットを抱いているからこそだったと思います。

2回のセッション内容をどう作れば、事後活動を身近なものに感じてもらえるのか？興味を持ってもらえるのか？私たち3名の派遣者は、出国前の準備の段階からいろいろと頭を捻っていました。自身が参加青年として乗船している時を思い出しても、まだ事後活動というもの

がピンと来ていなかったこともあり…。そこで、できるだけ多くの事例を紹介することで、事後活動には様々なスタイルがあることを知ってもらおう。得意なこと、身近なことがきっかけになればと思い、多才な既参加青年の力が必須だったのです。

参加青年には、最初は雲をつかむような感覚だった事後活動セッションだったと思いますが、1日目、2日目と進むにつれ、次第に考えがまとまり、言葉になり、表情も不安から期待へと変わっていく青年もみられました。セッションが終わった後、日本人・外国人に限らず特に地方から参加している青年たちから、「集う仲間が少ない地で事後活動をするにはどうすればいいか」「小さなこと、できることから始めたい」など話しかけてくれました。そういう不安を受け止め、場を共に作り上げるのが、各都道府県にあるIYEOです。この事業の経験をいかして何かに挑戦したい時は、同期の仲間でも良いでしょうし、IYEOにある地域の縦のつながり、他事業の仲間にも是非相談してみてくださいね。何か力になれるかもしれません。事後活動が、参加事業だけで終わるものではないように、物事や人の出逢いも、決してそこで完結するものではありません。きっと、一つ一つが次のステップへの準備となっていることでしょう。事後活動もあまり肩肘を張らずに、それぞれができることをまず一つ。そして、また、一つ。きつとつながっていくと思います。

「世界青年の船」事業とのかかわりは、節目節目で、折に触れ自身を振り返り見つめ直す機会を与えてくれました。等身大の自分を見た時、自分に正直であれば、足りないところが見えてきます。私にとっての「SWYスピリット」は、自分の足りないところを補うために、自分に挑戦し続けることなのかもしれません。これからも日々の生活、仕事をする上でも、「SWYスピリット」と仲間存在に感謝していきたいと思います。

「世界青年の船」事業は下船後も成長できるプログラム

筒井 麻衣子

“Hi everyone. I'm two two from SWY22.” こんな言葉で始まった事後活動セッションの私の発表は、緊張とこれから始まる大いなる挑戦に心が躍っていました。

SWY24の乗船のわずか2か月前、事後活動セッションの担当者として区間乗船しないかというお話を頂いた時は、断る理由もなく興奮してそのお話を受けました。

また、私はSWY22の参加青年だったため、まさか2年

後に再び乗船する日が来るなどと夢にも思っていませんでした。しかし、その数日後に、その責任の重さと英語でプレゼンテーションをする難しさに気づき、プレッシャーと不安で胸が押しつぶされそうになったことを今でも覚えています。

2か月間で準備することはとてもたくさんありました。セッションの担当者3名は千葉、広島、佐賀の出身

で、直接の打ち合わせは2回しかできませんでした。それでも地道なメールでのやり取りと、数少ない打ち合わせの中で、セッションを一から作るとは、とても興味深く、事後活動について考える良い機会となりました。

あっという間にスリランカへ向けて出発の日となり、夜遅くコロンボの港に到着すると、そこにはふじ丸が変わらない姿で静かに佇んでいました。すると、一気に船での日々がフラッシュバックし、思わず涙ぐんでしまいました。

ついにセッション当日、参加青年にSWYAAとは何か、事後活動とは何かについて説明し、スタッフ等の立場で乗船している既参加青年の紹介等も行いました。ただ、参加青年にとってはスリランカでの訪問国活動が終わったばかり。まだ頭の中で訪問国活動での経験を噛み砕く間もなく、「さあ皆さん、事後活動について考えてみましょう！」と私たち3名が来たのですから、当然戸惑いの顔も少なからず見受けられました。年々「世界青年の船」事業の航海日程が短くなっているため、訪問国活動終了直後に事後活動セッションを行わなければならないというひずみが生まれているのだなと感じました。

私はSWY22の下船後にスタートした、Tupendane（ツペンダンネ）というケニアのスラム街にある小学校を支援する事後活動について発表しました。ステージに上がる数秒前まではとても緊張していましたが、一度ステージに上がり、参加青年を見渡すと、彼らの眼差しの強さに圧倒されました。そして「よし、今から20分彼らに全力でぶつかるぞ！」と、一気に気合が入ったことは忘れません。

260名の国際的な青年を前に発表をすることは、もちろん今回が初めてでしたし、これを成功させたら自分にとって大きな自信につながるだろうと思っていました。嬉しいことに発表をしている最中も、皆が耳を傾けてくれている雰囲気を感じながら終えることができました。そして発表後には、参加青年、指導官、管理部員などたくさんの方から「とても良かったよ！」と言っていたいき、じわじわと達成感と喜びが込み上がってきました。

その後のグループ・ディスカッションでは、テーマごとに小さなグループを作り、参加青年が事後活動につい

て考える機会を設けました。ほとんどの参加青年は、事後活動とは何をしたら良いか見当もつかない状態で、グループに付いていた既参加青年の話やアドバイスを真剣に聴いていました。SWY22の時もそうでしたが、きっとこの時期にはまだ、大多数の青年が何をしたら良いか考えもつかないのではないかと思います。しかし、それは当然のことだと思います。事後活動セッションのねらいは、今すぐに事後活動の具体的な計画案や企画書などを出してもらうものではありません。あくまで下船後の自分を想像し、この特別な経験をどうしたら社会や自身自身の人生に還元できるか考えるきっかけであると考えています。代表者として一緒に乗船した高下さんが「今すぐに事後活動をするのはもちろんすばらしいことですが、今すぐでなくても良いのです。例えば5年後でも10年後でも良い。ただ、僕たちは事後活動を通じて自分たちがどれほど成長したか、事後活動を行うこと自体がどれほどすばらしいことか、ということを伝えるためにここに来たのです。」と話しました。まさにその通りで、私の場合、下船後Tupendaneを始動し、数多くのイベントを主催し、実際にケニアのスラムにある学校を訪問しました。

これらの経験はすべてTupendaneを始めたからこそ得られたものなのです。学校や会社だけでは学べないこと、「世界青年の船」事業に参加したからこそできることがたくさんあります。何かしたいけど、何をしたら良いか決めかねている方は、この機会に是非、自分の船の日々を振り返って、一番共感したことは何だったか、衝撃的だったことは何だったか、誰に何を伝えたいかを考えてみてください。

船はあくまでその後の人生の始まりにすぎません。下船後から始まる新たな航海において、事後活動のすばらしさを一人でも多くの参加青年が感じてくれることを願っています。

2日間にわたる事後活動セッションを無事終了されたことに当たり、セッション担当の高下さん、中村さんを始め、すべての関係者の方に御礼申し上げます。ありがとうございました。

第24回「世界青年の船」事業参加青年からのコメント

- ・アクションプランを作成するセッションがとても良かった。このセッションは「世界青年の船」事業が単なる交流事業ではなく青年間でのパートナーシップを生み出すものだというを示してくれた。
- ・プログラムを終えると何が待っているか、参加青年に考えさせることはとても良い。また、事後活動セッションは参加青年を現実へと引き戻し、乗船の前に考えていたことを思い出させて、下船後に社会貢献をするように彼らを導く「呼び鈴」のようなものである。
- ・自国の参加青年とのブレインストーミングのセッションはとても有意義で満足だった。しかしながら既参加青年の活動例をもっと見ることであれば、参加青年をやる気にさせられると思った。また、ほかの国の参加青年との共有の場もあれば良かった。
- ・地域ごとに自分たちに何ができるかを考える時間があったことがとても良かったと思う。実際に既参加青年の話を聞いたことで具体的に事後活動についてイメージすることができた。
- ・事後活動をしている方の話を聞き、参加青年間で目標を共有することができ、終了後の目標を考えることができた。
- ・事後活動に対する理解が参加青年にはまだ難しく、例年と同じような内容が多かった。「事業を広報する」等の一般的なものは、今までの活動を詳しく紙に起こし、現在抱えている問題とチャレンジを知らせた上で解決策を考えた方が良い。

